

観音物語(6) 漂い流れる

わくひょうる こ かい りゅうぎよしよ きなん ねん び かののりき はろう ふ のうもつ
 或漂流巨海 龍魚諸鬼難 念彼観音力 波浪不能没

或は巨海に漂い流れて 龍魚諸鬼の難あらんにも 彼の観音の力を念ずれば 波浪に没むること能わず

海洋に漂う船は、まさしく人生航路そのものである。龍魚とは海であばれる風雨であり、鬼とは不安に漂う疑心暗鬼である。タイムスリップして、平安時代の遣唐使船に乗り込んでみよう。

団員は 120 名である。およそ 10 日分の食料や飲料水が積み込まれた。五島列島から東シナ海を渡り切るまでは島がない。途中で補給できる飲料水は雨水だけである。

団員は海岸に打ち寄せる波濤に全身全霊の神経を集中する。慎重のうえにも慎重に、風と潮の流れを見計らっての出帆だ。五月初旬から待機して既に四十日が経過している。

七月六日、ようやく強い風が吹き始めた。

「帆を揚げよ！」

^{ともづな} 纜が解かれた。

船はみごとに風に乗った。滑るように海面を進む。

やがて強風が連続して吹き付けるようになった。船は風に乗って海を走る。風は予想以上に強い。激しさが増してくる。突風によって帆柱が折れるかと危ぶまれた。このままでは船が横転してしまう。すぐさま網代の帆を下ろした。波しぶきが甲板に激流して、すべてをさらっていく。団員は船底へ退避した。高波に昇ったり、波の底に吸い込まれたりして、船は上下左右に翻弄されるままである。舵は重く、操縦不能。舵を握れば振り飛ばされてしまう。舵を手放して船の揺れに任せるしかない。舵がひとり勝手に動いている。船は天命に任せられた。

それは台風であった。遣唐使船は台風を利用して中国へ一気に渡っていたのである。現代から考えれば、とんでもない渡海方法だ。しかし皮肉にも、確かに台風をとらえたのは成功だったいえようか。

荒波の不安を和らげてくれるのは「祈り」である。なす術がなければ祈りが湧いてくる。神仏にすがることによって不安が和らぐ。疑心暗鬼ではどんな行動に出るかわからない危険を孕む。心に動揺がなくなれば知恵が授けられよう。無理矢理に舵を回せば、破損か、横転である。ここは天に任せて祈ることだ。暴風雨の波頭を上下しながら、船は一昼夜にわたって翻弄され続けた。

翌日の昼過ぎになって波風が治まってきた。太陽が眩しい。甲板には空と海の碧色の風景だけが広がる。まるで煩惱の荒波がおさまって、悟りの境地にいるようだ。穏やかである。潮に流されるままである。南へ、南へと流れているようだ。やがて食糧が尽き果てて、疲労と空腹との戦いが始まった。雨が降らない。日照りが続く。瀕死状態で動けぬ団員がいる。東シナ海を三十四日間も漂った末に、水平の果てに白い霧をかぶる山脈を発見。

「おい、陸が見えるぞ」

「あっ、あれは…、あれは大陸だ！」

「陸だ」

「陸だ、陸だ、陸だ」

母が赤子を出産したときのように、それぞれが肩を抱き合って踊り跳ねた。

櫓は目的地が見えてから漕ぐ道具である。大海原では糸が切れた凧のように風と潮の流れに任せたままであったが、陸を目指してやっとなら漕ぐことができるようになった。漕いでいると穏やかな気持ちになる。腹の底から歓びが溢れてくる。空腹も忘れて「エッサ」「エッサ」の掛け声に力が漲る。やがてその掛け声が、観世音菩薩の称名に変わっていく。

「ナーム、カンゼ、オーン、ポー、サー」

「ナーム、カンゼ、オーン、ポー、サー」

人生は海を漂っているようなものである。愛欲に溺れたり、誘惑に負けたりする人もある。波浪はいつ押し寄せてくるかわからない。自分はしっかりしていても、心配の種は次々と湧いてくる。不安定な政治や、変動の激しい経済界の波に乗って、娑婆世界の荒波を浮き沈みしながら航海しているのである。

「生きるうえにおいて、観世音菩薩への祈りがあるのとないのとでは、心配事の対処が大きく異なるのは確かである」と、世尊釈迦牟尼仏は海に漂う水難を例話にして語った。